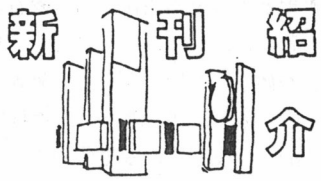
https://rodosoken.com/



鹿児島経済大学地域総合研究所編

『地域のくらしと高齢化社会』

本書は、鹿児島経済大学地域総合研究所で取り組まれた研究プロジェクト「高齢化社会と鹿児島－その課題・対応・展望」の成果の一端である。高齢化の社会的対応のあり方は地域社会のあり方と密接にかかわっており、その検討には地域の社会の構造や文化を視野に入れた調査と研究が不可欠であること、高齢化先進県である鹿児島県の現状と課題を明らかにすることは何らかのインパクトとなりうることとの観点にたって、実態調査を踏まえた「実証性をもった地域からの発信」をめざしてまとめあげられた共同労作である。

全体は８つの章から構成されている。総論的に高齢化および高齢化社会を論じた第１章に始まり、消費生活（第２章）、住環境（第３章）と続き、第４章から第６章でマンパワー問題を多面的にとりあげ、最後の第７章と第８章で高齢者雇用を分析している。総論では、高齢化の一般的分析に続いて、県外転出による若年層の人口割合の低さゆえに、長くない平均寿命にも拘わらず高齢化率が高く高齢者のみ世帯の割合も高い鹿児島の特徴が明らかにされ、消費生活・住環境の分析では、移動の制約ゆえに地元の馴染みの店での買い物を求める高齢者特有の消費サービスニーズとこうした地域の消費スタイルを維持する必要性、全国一高い高齢者の独居率とその独居高齢者の持ち家率・居住環境の低さ、高齢者世帯への公的な住宅供給の必要性などが析出されている。またマンパワー問題の分析では、社会福祉関係の前職をもたない老人ホーム施設長の多い鹿児島の実態と資格化の必要、社会福祉現場実習体験による学生の意識の前進と福祉実習教育の積極的意義、実践的で継続性のあるソーシャルワーカーの卒後教育の必要性などが、実態調査にもとづきながら明らかにされていく。最後の高齢者雇用については、鹿児島経済の停滞性・低生産性に規定された高齢失業者の固定化・累積化の実態、高齢者雇用問題を失業問題として捉える視点を欠いた県の労働政策の現状、それに対置すべき政策の基本方向等が鋭く分析されている。

高齢化にともなう地域社会の変化や課題は、いうまでもなく地域的な特性を纏って現出する。しかし、地域性の徹底した分析は逆に問題の普遍性を明らかにし問題解決の共通の方向を指し示す。本書はそのことを実証してくれている。こうして丹念な実態分析を踏まえた「地域からの発信」が高齢化施策の前進には欠かせない。是非一読をお勧めしたい。

（日本経済評論社・1997年４月刊・3,500円）

（横山寿一・金沢大学教授）

千田忠男編著

『労働科学論入門』

現代の過密労働規制を課題とする運動団体と共同した「現代労働負担研究会」の中心メンバー、千田忠男氏を編者とした、労働医学・社会医学の若手・中堅研究者による意欲的な学習テキスト－現代社会と働き方を考える『労働科学論入門』が刊行された。

これは、著者たちの日頃の大学での講義、働くものの労働安全衛生やいのちと健康を守る運動への協力、産業衛生学会などへの研究活動をふまえて、学生、労働者、労働安全衛生担当者、研究者などに広く読まれるものをと共同で執筆したものである。

その内容は、第１部として、労働科学論の基本を今日の研究と実践の成果をふまえて、自然と人間労働、労働の動態、労働の生産力の向上、社会の中の労働、生産様式の変革と労働の変容で構成されている。第２部は、現代労働の問題と課題を、労働の動態と負担軽減、過労死とその予防、職業性ストレスとその緩和、中高年者の労働と健康、海外派遣と心身の健康管理、コンピュータ労働の現実と展開、養護学校の教員にみられた職業病、それに執筆者の問題意識を議論した「これからの労働のあり方を考える」と、終章に「労働の未来」を問題提起している。

読んでみての感想と意見は、第１部は、労働医学・社会医学の立場から、今日の研究成果をふまえて、

https://rodosoken.com/

各テーマごとに論点を整理されて、できる限り分かりやすく記述する努力がされている。ここでの論点を、科学的な哲学・歴史学・社会政策や労働問題の研究者と論議すると「現代社会の労働」について、さらに深められると思う。共同研究の機会が望まれる。

第２部は、執筆者の実践や運動団体との共同での成果がよく整理され反映した読みごたえのある内容であった。これは、ぜひ多くのいのちと健康を守る運動に関わっている方々に読んで欲しいし、運動団体のもっている要求・政策や課題も執筆者にもっと提起して欲しい。そして、「現代労働の課題」を共にさらに実践的に深めていきたいと思う。

著書全体を通して執筆者の意欲的な努力が感じられ、資料や参考文献、引用資料・文献も豊富であり、学習テキストとして、すぐれた内容をもっている。多くの労働者、研究者にぜひ読んで検討してもらいたい書物である。

（北大路書房・1997年４月刊・2,500円）

（佐々木　昭三・会員・愛知働くものの健康センター事務局長）

塩田庄兵衛著

『私たちの自由民権運動』

本書は社会運動史、労働運動史の権威である塩田氏が、自ら「末端に参加してきた」という「現代の自由民権運動」（はしがき）としての「電力労働者の半世紀の闘い」を中心に、氏の最近のエッセイを合わせて一書にまとめたものである。

ここで「電力労働者の半世紀の闘い」とは戦後の産別会議当時の電産労組の闘いから今日の中部電力、関西電力、東京電力の労働者による人権侵害・思想差別撤廃闘争にいたる長い闘いを指している。私は氏の驥尾に付して東京電力の人権侵害・思想差別撤回闘争の支援に参加した一人で、先に谷江武士とともに著した『東京電力』（大月書店）において、独占企業としての東京電力の企業分析をおこない、東京電力の反共労務管理政策を批判し、労働者の闘いを紹介したが、氏は本書で労働運動史家の立場からこの闘いの歴史と教訓を明らかにしている。さらに氏によれば本書は新日本新書の『河上肇』、『幸徳秋水』の評伝とあわせて三部作を構成するという。氏の本書に込めた思いが伝わってくる。

本書の「第１部　私の戦後史から」で氏は人類の歩んできた道を、「自由と民主主義の拡充・充実」として語っている。60年安保闘争、全電通長岡事件を題材とした映画「母さんの樹」、緒方宅電話盗聴事件など戦後の統一戦線や基本的人権を守る闘いの流れから自然に「第２部『星と稲妻』の旗――物語　電力労働者の半世紀の闘い」へと入っていく。裁判闘争のなかでの原告の証言をフルに活用して綴られたこの部分は本書の中心をなすとともに、史家としての氏の本領が発揮されているところでもある。ちなみに、ここでタイトルとされている「星と稲妻」とは電産の組合旗のシンボルを指している。

この闘いは、やがて95年９月の関電・最高裁完全勝利判決、12月の東電の地裁判決５連勝に続く全面解決、97年３月の中電・地裁全面勝利判決を迎えるが、そこにいたる20年を越す電力労働者の基本的人権を守る長い闘いの勝利は、日本と世界の自由と民主主義の発展にとって計り知れ無い意義をもっている。同時に今日なお全国の数多くの職場では資本の反共労務政策との闘いが日夜続けられているが、本書はそうした闘う労働者が元気の出る励ましの書となっている。本書が日本の労働者のなかに広がれば広がるほど、労働者の基本的人権を守る闘いが前進することは間違いないであろう。

（新日本出版社・1997年９月刊・2,200円）

（角瀬保雄・常任理事・法政大学教授）